

ジェンダーと兄弟姉妹関係

パプアニューギニアにおける女兒死亡の事例を基に

Gender and Sibling Relationship:
From the Empirical Study in Papua New Guinea

小谷 真吾

- | | |
|------------------------------|----------------|
| ① 家族とジェンダーの構築性 | ⑥ 人口構造及び性比の動向 |
| ② 男児選好を巡る議論 | ⑦ 性選好の傾向 |
| ③ パプアニューギニアの
ジェンダーと「女兒死亡」 | ⑧ 世帯内食物分配 |
| ④ 調査の対象地域 | ⑨ アデ関係 |
| ⑤ カルリの社会と日常 | ⑩ アデ関係の背景 |
| | ⑪ ジェンダーと兄弟姉妹関係 |

【論文要旨】

本研究では、家族内の子供のジェンダーについて、パプアニューギニアにおける女兒の高死亡率に関する事例研究を行なうことによって、特に兄弟姉妹関係に焦点を当てながらその動態を追求する。現在、近代家族の構築性についての認識は近年の社会科学において広く共有され始めているが、家族内のジェンダーに関する分析において、多様な社会形態における子供のジェンダーに関する研究は、そこに多くの問題群が存在するにも関わらず、ほとんど行なわれてこなかった。その子供のジェンダーが関わっている問題の一つとして、低年齢層における「女兒死亡」の問題がある。この問題は、男児選好についての研究をテーマとして追求されてきているが、社会の構築性及び多様性に対する視点が欠落している。筆者は、1998年11月から1999年11月までの約1年間、パプアニューギニア高地辺縁部に居住するカルリと呼ばれる言語集団において各種の調査を行ない、当該地域において「女兒死亡」の問題が存在していることを明らかにし、その人口学的動態を分析した。その上で、参与観察に基づいた分析を行なうことによって、「女兒死亡」は、親による差別によって起こるのではなく、「姉」が「弟」の世話をするという、当該地域に特有の兄弟姉妹関係によって起こっている可能性が高いことを示した。そしてその構築性について、親が多く死亡しているという人口構造が、兄弟姉妹を軸とする社会構造の背景となり、その結果「姉」の主体的な意思決定が導かれるという動態を明らかにした。本研究の結果に基づけば、親子関係のみに着目して「女兒死亡」の問題、ひいては家族内のジェンダーを論じることは、問題を正しく理解できないだけでなく、解決の方法を探る上での障害になりかねないと考えられるのである。

①……………家族とジェンダーの構築性

アリエスが子供の構築性を指摘して以来 [アリエス 1981], 近代家族の相対性が問われ続けている。親, 子供, 兄弟姉妹などの, 今日我々が家族の構成員と認識している存在がテキストに描かれ始めたのは, 近代になってからであり, それ以前, それら存在は家族の中ではなく共同体 (大家族等) の中に存在していたものであると言う議論である。アリエスの主張自体は様々な批判にさらされているが, 近代家族の構築性についての認識は近年の社会科学において広く共有され始めている。

その構築性の中でも特に論点となっているのが, 家族内におけるジェンダーである。ちょうど家族の構築性が議論され始めたのと時を同じくして, ジェンダーの構築性も問われ始めた。スピヴァクが描くように [スピヴァク 1998], 主体としてジェンダーを「生きて」いる人々と, 政治的介入者としてその人々を記述する人々との乖離, あるいはフックスが批判するように [フックス 1997], 多様なジェンダーの様相が西欧の二元論に基づくジェンダーに収束されてしまう矛盾など, 「男」「女」という存在が時と場所を問わず常に存在し, 同じ関係性を持つと言う考え方は過去のものになりつつある。この近代家族及びジェンダーの構築性を総合して, 特に, 夫婦関係に関する分析が盛んになされている。

しかし家族内のジェンダーに関する分析において, 子供のジェンダーに関する分析は驚くほど少ない。家族外における「子供期」のジェンダーについては, 学校教育におけるジェンダーの構築等に対して多くの優れた研究がなされているのと対照的でさえある [ex. 柏木恵子他編 1995]。それでは家族の子供におけるジェンダーは考慮する必要がないのだろうか。つまり家族内での子供のジェンダーは「大人」のジェンダーと並行であり, ジェンダー役割や権力関係なども同一であって, 特に再考する必要はないのであろうか。

この問いは, 日本における核家族内の呼称を省みるだけでも論考することができる。例えば親に対する呼称では, 親同士においても子供からにおいても, 「お父さん」「お母さん」のような単一の呼称によるジェンダー判別が行なわれている (親同士の呼称では名前そのものを用いる場合が, 現在では一般的かもしれない)。一方で, 子供同士における呼称では, 親からの場合, 「～ちゃん」や名前そのもののようなジェンダーを伴わない呼称が用いられるが, 子供同士においては, 年上のものに対して「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」のようなジェンダー判別を伴った呼称が一般的に用いられている (ただし年下のものに対しては, 親からの呼称と同じ「～ちゃん」の呼称が用いられている)。この「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」という呼称は, 親からもそれに相当する子供を指す場合にも用いられる。

つまり家族内の子供のジェンダーにおいては, その立場による違いが際立っており, 「大人」のジェンダーに対してよりも, 分析し一般化していくことが困難であることが, 研究を少なくしている要因であると考えられる。家族内の「大人」に対する分析では, 「お父さん」「お母さん」, つまり夫役割及び妻役割, あるいは父役割及び母役割を分析していけばよい。また家族外であれば子供であっても, 男児と女児を分析していけばよい。しかし家族内の子供は, 日本においては上記のよ

うな立場の違いがあり、まして多様な社会（例えばアメリカでは、また異なった家族内での呼称が存在する）を考慮すれば分析すべき対象は膨大となる。

では家族内の子供のジェンダーについての研究が進まないままでよいのか。前述の近代家族、あるいはジェンダーの構築性を考慮すれば、それにははっきりと否とすることができる。むしろ学校教育におけるジェンダーを研究することよりも緊急を要するかもしれない。ジェンダーの様相の多様性を追求していくポストモダンフェミニズムの視角から見れば、あるいは近代家族の構築性を論じるためにも、家族内における立場の違いによる性役割の多様性は、主要な分析対象となりうる。また家族の問題に関する実践を考慮した場合、緊急性はより高まると考えられる。すでに「学校化」され、「男児」「女児」の二元論を以って「子供期」のジェンダーを論ずることができる先進国においては、子供のジェンダーの多様性を顧みることがほとんど必要ないのかもしれないが、これから「近代化」していく集団に対して、産児制限など家族内のジェンダーに直接介入する政治的実践を行なう場合、あるいは「学校化」を進めて行く場合、近代家族の枠組みを押し付けていくことは必ずや問題を孕むことになる。

さて近代家族の枠組みを一般化するべきではない事象として、子供だけではなく、親も必ず家族内に存在していたわけではないことも考慮する必要がある。歴史人口学の分析に拠れば日本の社会においても、近代以前には15歳平均余命が40-50歳程度であり、50歳まで生きられる人間は全人口中約半数に過ぎなかった[速水1988]。つまり育児の途中で片親あるいは両親とも死亡してしまう子供の数は、決して少なくなかったはずであり、親子関係のみを中心とした家族組織では、とても人口再生産を維持することができなかつたはずである。これに対する構造として、もちろん拡大家族の存在が挙げられるが、子供のジェンダーを顧みた場合、兄弟姉妹の存在も無視できないものであろう事が予測できる。実際、古代の戸籍調査においては、「姉」という家族組織における兄弟姉妹関係の重要性を示唆する名称が存在している[児島1997]。前述のように「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」にはジェンダーがある一方、弟、妹にはジェンダーが割り当てられないのは、このような背景があることを示唆する。

そこで本研究では、家族内の子供のジェンダーについて、パプアニューギニアにおける女児の高死亡率に関する事例研究を行なうことによって、特に兄弟姉妹関係に焦点を当てながらその動態を追求していく。このことはパプアニューギニアの事例が、「近代以前」を直接的に表象することが可能であると言う進化主義的な意図ではなく、人口学的に考察した場合、親が家族内に存在しない時に子供のジェンダーが如何に構築されているかを見たいがためである。

②……………男児選好を巡る議論

パプアニューギニア (Papua New Guinea) において15才以下の女児は、男児よりも死亡しやすい状況に置かれている。これは女児に特異的な疾病が存在するわけではなく、人口構造を見て初めて明らかになる現象である。その様相を、図1に示した。図において、パプアニューギニアでは15歳まで性比の値が増え続けているが、それはつまり女児が死亡して、人数が減っていつているからである。⁽¹⁾なぜ女児は、男児よりも死亡しやすいのか。最も単純な結論を言えば、そこには男児

と女兒にジェンダーが存在しているからだと考えられる。つまり女兒は、男児と比べた場合、労働や食事において性役割に違いがあり、疾病や栄養失調、事故のような直接的死亡要因へのリスクがより高まっているのだ、と推測される。そこにおいて、この「女兒死亡」は、子供のジェンダーを再考するために最適な素材であると考えられる。

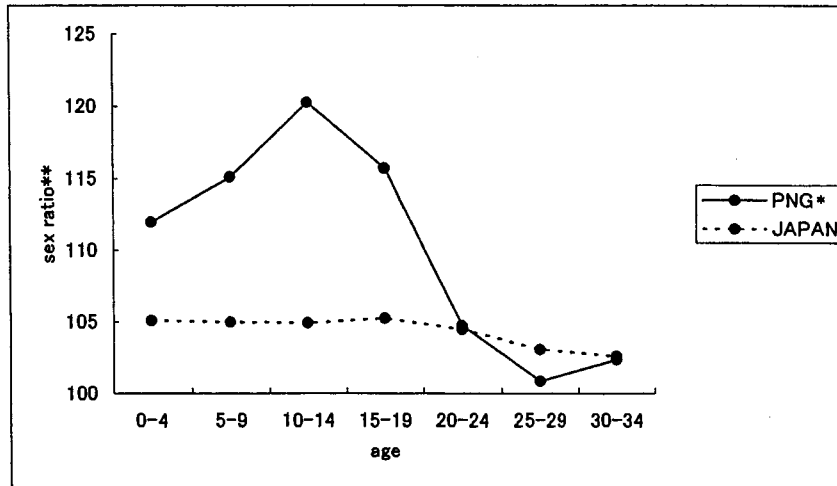


図1 パプアニューギニア及び日本の性比の年齢推移

*PNGは、Papua New Guineaを表す。

**Sex ratioは、男性/女性×100で表す。

PNGのデータは、1990年の全国人口統計 [National Statistical Office 1990]、及び

各州 (North Solomons州を除く19州) の人口統計 [National Statistical Office 1990] を基に算出した。

日本のデータは、「平成9年10月1日現在推計人口」 [総務庁統計局 1998] を基に算出した。

この低年齢層における「女兒死亡」について、これまで研究が行われてこなかったわけではない。この問題は、男児選好 (Son preference) についての研究をテーマとして追求されてきている。男児選好とは、生まれてくる子供について男児を望む、あるいは子供を育てるに当たって男児に対して手をかけることを指す。同じように、生まれてくる子供について女兒を望む、あるいは女兒に手をかけることを、女兒選好 (Daughter preference) と言い、両者を総称して性選好 (Sex preference) と呼ぶ。性選好を定量的に明らかにするため、実際の調査においては、WFS (World Fertility Survey) の質問方法のように、既婚の女性が生まれてくる子供に、男児、女兒どちらを望んでいるかを聞いた上で、男児の数を女兒で割るという方法がとられている [Creland, Verrall and Vaessen 1983]。

性選好に関するデータの収集は、死亡率性差の問題とは直接関連しない立場で始められたのであるが、⁽²⁾研究者は当然、性選好と死亡率性差の関係には興味を抱いていた [Williamson 1978]。その両者の関係を、実証的な形で初めて示したのが、D' Souza と Chen のバングラディッシュにおける研究である [D' Souza and Chen 1980]。元来、南アジアにおいては、40歳代以下の世代で女性の死亡率が男性の死亡率より高く、集団全体の性比も110を超えることがしばしばあることが知られており、一方人類学および社会学的調査から、非定量的ではあるが、従来から上昇婚制度に伴う男児選好の存在が示唆されていた [Miller 1981]。南アジア地域は、女性を取り巻く環境の厳しいことが、

身体的指標や労働量などの計測により明らかであったが [Curtin 1982], そのような背景に加えて、この地域ではカースト制度の下で、女性はより上位のカーストの男性と結婚する傾向があり、その際、男性側に巨額の持参金を払わなければならないことから、親は、娘が生まれることを望まないという論旨である。

そのような先行研究を基に、D'Souzaらは、国連主導で行われたWFSによって、バングラディッシュの性選好の傾向が、集団間の比較によって、定量的に明らかになったのを利用し、性選好と女兒の死亡率をつなぐものとして、ディファレンシャル・フィーディング、つまり世帯内食物分配における差別と、治療行動、つまり男児に対する親の治療行為と女兒に対するその比較の実証的調査を行ない、行動と死亡率の関係を明らかにしたのである [Chen, Huq and D'Souza 1981]。それ以後、南アジアにおいて、男児選好による女兒差別行動と女兒の高死亡率の関係を検証するための、疫学的研究及びフィールドワークが盛んに行われている⁽³⁾。

以上、「女兒死亡」の主な社会文化的要因として考えられている男児選好に関して、簡単に先行研究を見てきたが、その研究は、いわゆるバイオメディスンのパラダイムを持つ人口学及びその周辺領域に限定されている。それ故に、その分析においては、主体性、歴史性、政治性への視点が欠落しており、家族あるいはジェンダーの構築性について論じられてこなかった。そのような問題点の中で、最も顕著で、かつ実践において危険性を孕んでいると考えられるのが、分析における親子関係への偏向である。Son (息子) preference 及び Daughter (娘) neglect という名称からして、すでに女兒の死亡は、親との関係性のみ起因するものと想定されている。

もちろん多くの生物において、子供と関係を持つのは親であることは事実であろうが、人間は、社会という多様な関係性が構築されるような仕組みを持っているため、むしろ生物学的一般論の例外とされるべきであろう。まして、その社会が、地域、時代、集団によって、著しく形態を異にしていることを省みれば、子供がストレスを受け取るような関係性は、親との間だけに限られているとは、とても言い難い。

表1 バングラディッシュ、マトラブ州の1974-1977年における年齢別、性別の死亡率(千人当たり)*

Age group	Both sexes	Female	Male	Ratio F/M
0	131.2	131.5	130.9	1.00
Neonatal (<1 month)	73.0	67.6	78.2	0.86
Postneonatal (1-11 month)	58.2	63.9	52.6	1.21
1-4	28.4	33.9	23.3	1.45
5-14	3.2	3.7	2.7	1.37
15-44	3.7	3.8	3.6	1.06
45-64	20.2	18.0	22.1	0.81
65+	88.5	92.1	85.7	1.07
All ages	16.4	16.7	16.1	1.04

*Chen, L.C., Huq, E and D'Souza, S. 1981. Sex bias in the family allocation of food and health care in rural Bangladesh. *Population and Development Review* 7: 55-70. より転載。

そしてその例証は、男児選好に関する先行研究の結果にさえ表れている。男児選好の事例において、女兒の死亡率が男児のそれを上回るのは、出生後一定期間を経てからのことが多く、出生直後の年齢層では、どんなに男児選好の傾向、あるいはそれ以降の年代での「女兒死亡」の傾向が強

でも、男児の死亡率の方が高い(表1)。つまり出生直後の授乳という、かなり生物学的に規定された関係性によって親と関係している間は、男児の方が死に易く、その後親以外の人物との関係性を持ち始めてから、女児の死亡率が高まるのである。先行研究においては、この結果をも生物学的要因として結論付けてしまっているが、「女児死亡」には親以外の人物との関係性も大いに関係してくると考えれば、まったく異なった解釈が可能になってくる。

この男児選好に関する研究の親子関係への偏向は、明らかに近代家族の核家族を前提とした父系制的構造に由来しているものである。つまり西欧諸国、あるいは近代化を完全に受け入れたような国々の人々にとっては、子供が公的な社会関係を築ける対象が親に限られているような核家族の構造が、あまりにも根深く内面化されているが故に、近代化の進んでいない社会では、依然、子供が親以外の人々との関係性を深く保っている可能性のあることなど、想像もできないのである。

ではこの問題に対して社会科学の立場から行なわれた研究はないのだろうか。女児の死亡は、生物学的及び文化的に規定されるような広義の「女性」という範疇で見ると、フェミニズムが射程とする「女性問題」の中に含まれると考えられる。実際、世界的な女性会議の場では、この問題が取り上げられることもなくはない。例をあげれば、北京女性会議において、「戦略及び行動」の章で、「世界のいくつかの地域では、男性は女性より100人につき5人多い。この乖離の理由には、とりわけ、女性器の切除、乳幼児殺しや胎児期の性選別を引き起こす息子志向、幼児を含む若年結婚、女性に対する暴力、性的搾取、性的虐待、食物配分その他の健康及び安寧に関する慣行における少女への差別のような、有害な態度及び慣行が含まれる。この結果、大人になるまで生き残る少女は、少年より少ないのである。」[総理府内閣総理大臣官房男女共同参画室編1996]といった宣言が採択されている。

しかしながらフェミニズムのよりアカデミックな立場の議論において、この「女児死亡」の問題が登場することはほとんどない。上記の宣言に挙げられている女性器の切除や性的虐待の問題は、単体の問題としてフェミニズムの先鋭的な議論の中に繰り返し登場してくるのに対して、奇妙なほどに関心を集めていないのである。もちろん一部では、Warrenのように生命倫理の立場からこの問題を取り上げるフェミニストもいるが[Warren 1985]、その議論は、依然、人口学における男児選好研究の流れに沿ったものである。この状況は、おそらくポストモダンフェミニズムにおいて議論されている問題と無縁ではあるまい。冒頭に挙げたサバルタン性についてのスピヴァックの議論、あるいはフックスが展開するようなブラックフェミニズムの議論によって明らかになってきたように、西欧中心主義的な差異化のメカニズムは、フェミニズムにおいてさえも依然、機能しつづけているのである。

フェミニズムが、「女児死亡」を取り扱う際に、もう一つ、注意しておくべき点が存在する。北京会議の諸宣言の中では、「女児」という述語が、注意深く「女性」と言う述語と区別されて使用されている。「女児」=「女性」という等式は、ジェンダーは社会的に構築されるものというドグマの上では成立しない。それ故に、フェミニズムは、果たして女児が権利を勝ち取っていくために共闘できる存在であるのかどうか、決めかねている状態であるように見える。「女児」に対する抑圧を、「女性」に向けられたものとして読み替えることは、フェミニズム自らが、ジェンダーの差異化を再生産することに手を貸してしまうことであるし、一方で、「女児」に対する抑圧を告発して

いかなることには、「女性」に対する抑圧の再生産の構造を脱構築していくことはできないというジレンマが存在するのである。どちらにせよ、「女兒」という主体が議論に参加することはなく、「女兒死亡」の問題は、フェミニズムにおいても、やはり主体の存在の彼方で議論が行なわれているのである。

③……………パプアニューギニアのジェンダーと「女兒死亡」

では本研究の対象としている、パプアニューギニアの「女兒死亡」において、その構造とその構築性に関する情報は、蓄積しているのだろうか。実は、パプアニューギニアにおいては、社会構造あるいはジェンダーについて、パプアニューギニアの人々から見れば過剰と言えるほどに、人類学者が情報を収集しており、まさにその点がこの地域を対象に選択した理由の一つである。

特に、ジェンダー論における理論構築において、パプアニューギニアの民族誌が果たした役割は大きい。Meadは、必ずしもパプアニューギニアのみで調査を行っていたわけではないが、セピック川流域の3集団において行なった調査 [Mead 1971] の報告は、ジェンダーの構築性について最も雄弁に示したものであった。生物学的な多様性が存在しない近隣の3集団を比較し、ある集団はジェンダーに関わらず「女性的」、ある集団は「男性的」であり、またある集団は、西欧社会とは全く逆のジェンダーの傾向を示すことを明らかにしたことは、文化や社会構造によってジェンダーが形成されていくことを証明するのに決定的な役割を果たした。

また、より最近の研究として、M. Strathernのメルパにおける調査は、構造機能主義の中で、交換される「物」としてしか扱われてこなかった女性が、実は交換による社会関係を構築する主体であり [Strathern 1972]、かつ女性間で独自の交換体系を持つことを明らかにした [Strathern 1981]。彼女の研究は、フェミニズム全体に与えた影響では Mead に比べて小さいかもしれないが、同時期に Weiner によって行なわれた研究 [Weiner 1976] と共に、人類学や社会学における構造機能主義の「構造的」限界を示し、これらの分野にポストモダンの認識論を普及させることになった、実証的研究の原点の一つになっている。

以上のように女性の状況に関する研究はパプアニューギニアの民族誌において、かなり蓄積してきているが、「女兒死亡」の問題を直接調査した研究はない。しかし南アジアにおける先行研究と同じように、女兒に対する嬰兒殺しの報告は、様々な民族誌に断片的に記述されている。McDowellが、これまでの報告をまとめているが、彼女が嬰兒殺しの記述を認めた43の集団における民族誌の内、6の集団において、生まれてきた子供が女兒であるからという理由で嬰兒殺しを行っていた [McDowell 1988]。その中の半分の3集団は、ハイランド (Highlands: ニューギニア高地地域) の集団である。また前掲のMeadの民族誌中にも女兒に対する嬰兒殺しの記述があり、その集団は、彼女の考察の中で「女性的」な集団アイデンティティを持ち、また性別による社会的差異が少ないと判断されたアラベシュ (Arapesh) であると言う点は興味深い。

女兒に対する嬰兒殺しを行っていた集団は、いずれも父系制の社会構造を持っており、その理由として、「女兒は、いずれは自分の家族/集団を出て行く存在であり、養う価値がない」ことを挙げている。また Townsend は、Sanio-Hiowe における嬰兒殺しに関する詳細な記述を行なってお

り [Townsend 1971], そこで女兒に対する嬰兒殺しは、父系的な社会構造が理由であると同時に、人口増加を抑制する目的で行なわれていることを報告している。

ではパプアニューギニアに男児選好は存在するであろうか。前掲の McDowell が編集した論文集は、いわゆる「子供の価値理論」の一つのケーススタディとして、Townsend 主導のもとに行なわれた一連の調査の結果をまとめたものであるが、定量的に性選好を調査した研究はない。しかし記述だけなら、調査対象の9集団の内、2集団において男児選好が見られる。その他の集団は、性選好なし、あるいは男女両方の性選好が見られた。また明確な女兒選好の報告はない一方で、男児選好については様々な民族誌において定性的な記述が存在する。例えば Meggitt は、Mae Enga において、男性は、自分のクランの成員が増え、また新たなリネージを創設するかも知れない男児を熱烈に望んでいる事例を報告している [Meggitt 1965]。

パプアニューギニアには、母系制の社会構造を持つ集団も少なからず存在するが、それらの集団が女兒選好の傾向を示す訳ではないことから、父系制=男児選好、母系制=女兒選好という図式は成り立たないことは明らかである。しかし男児選好の傾向を示す集団は、必ず父系制であることから、父系制と男児選好の間には何らかの関係があることが推定される。いずれにしても嬰兒殺しと同じように、男児選好も「女兒死亡」を調査していく際の、間接的な情報にしか過ぎないのであるが、パプアニューギニアにおいて「女兒死亡」の背景となる構造はそろっているのである。

④……………調査の対象地域

これまで述べたような問題意識を以って、筆者は、1998年11月から1999年11月までの約1年間、パプアニューギニア高地辺縁部に居住するカルリと呼ばれる言語集団の中において、各種の調査を行った。パプアニューギニアの全図とそれぞれの州、そして、本研究の対象地域である、高地辺縁部の大パプア平原 (Great Papuan Plateau)⁽⁴⁾ の概要は、図2に示した通りである。

カルリは、南部高地州の西南部にそびえる、ボサビ山の北斜面に居住する、人口3,000人程度の言語集団である。ボサビ山は、南部高地州から西部州にかけて広がる大パプア平原の東部にある孤立した山塊であり、標高は2,300m、カルリの居住する区域は、標高400mから700mの間である。カルリ居住域の年間平均気温は、最低20度、最高28度、年間降水量は、4,000mmを超え、パプアニューギニアの中でも最も湿潤な地域の一つである。気候による季節変化は鮮明ではなく、植生的には熱帯雨林気候であると言える。

カルリ周辺の村落と地形を図3に示した。カルリは、行政的には、南部高地州、Tari district、Orogo Census Division に属し、12の村落に分かれている。筆者は、この中のシパラマを主な滞在地とし、主な調査を行なった。シパラマは、カルリ居住域の西辺に当たり、標高は500m程度、カルリ居住域の中ではサゴヤシの生育に最も適していると共に、より東方の村落では存在しないココヤシも多少見られる。村の人口は、1999年11月の時点で150人、その構成は、男性79人、女性71人である。シパラマの人々の所有する土地は、東西に2.5km、南北に14kmの、細長い長方形の形に広がり、面積が35km²、人口密度が4.3人/km²と計算される。この村は、カルリの村落の中でも、最も近代化の遅れた村の一つであり、他の村落では最低ひとつは存在する、エイドボ

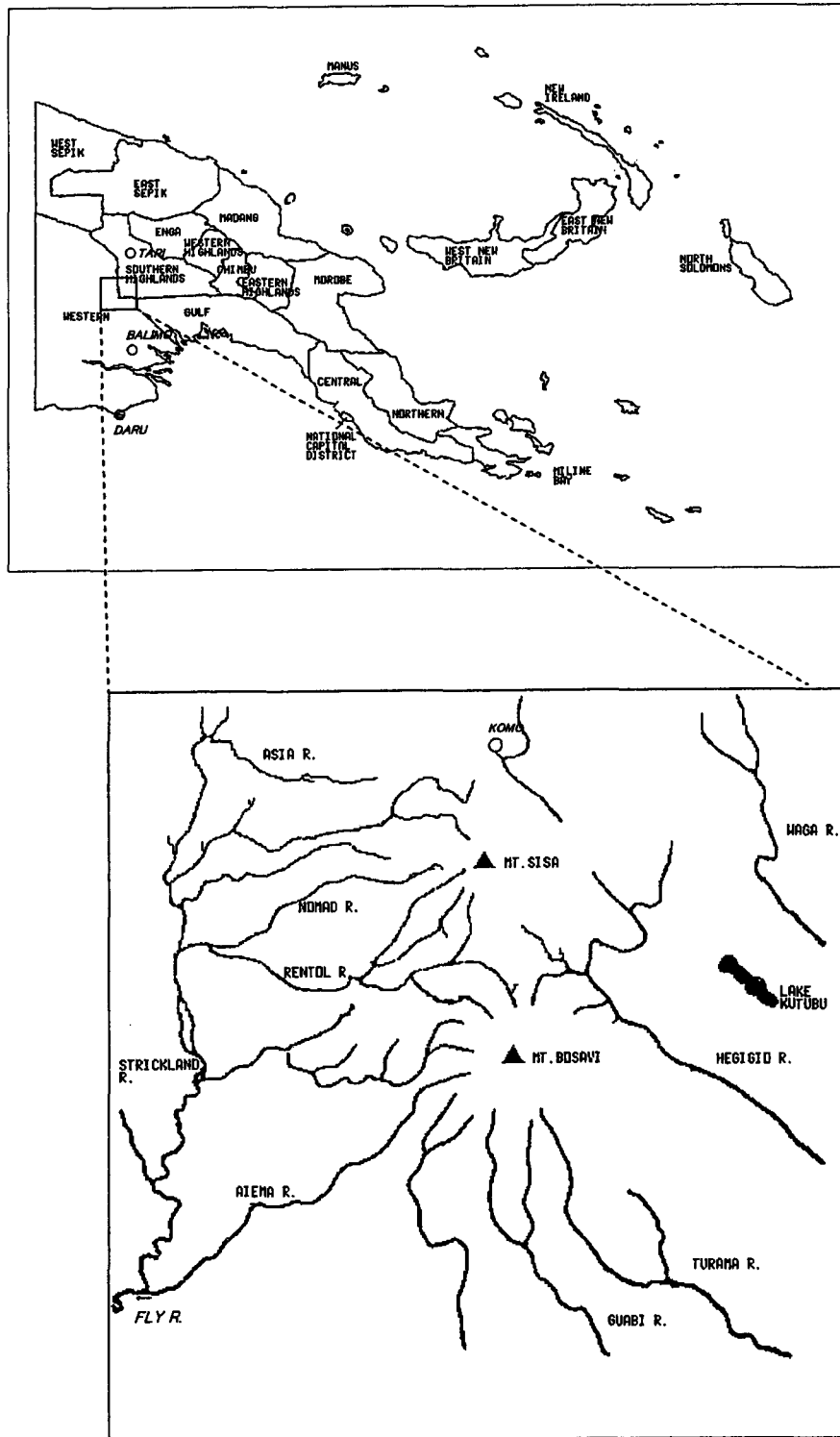


図2 パプアニューギニア全図及び Great Papuan Plateau の地形図

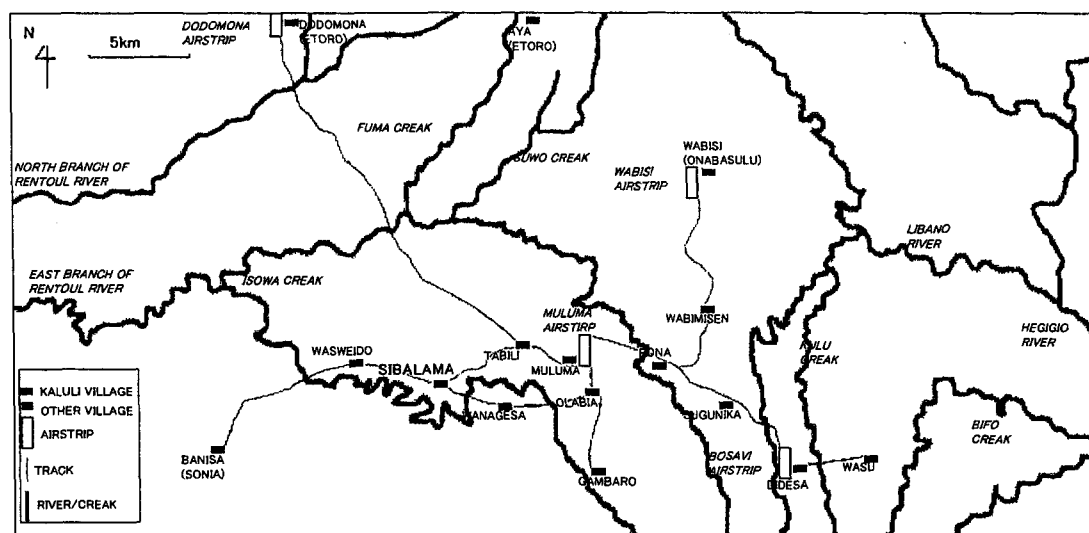


図3 Kaluli周辺の村落と地形

スト、雑貨店、雨水貯水槽など何一つない。

カルリの人々は、図3における12の村落を、方言と歴史的及び社会経済的な結びつきから、大きく4つのグループに分けて認識している。ワス (Wasu)、ディデサ (Didesa)、スグニカ (Sugunika)、ワビミセン (Wabimisen) の村落が、オロゴ (Orogo)・グループ。ボナ (Bona)、ムルマ (Muluma)、オラビア (Olabia)、タビリ (Tabili) の村落が、カルリ (Kaluli)・グループ。ガンバロ (Gambalo)、ワナゲサ (Wanagesa) の村落が、ワルル (Walulu)・グループ。シバラマ (シバラマ)、ワスウェイド (Wasweido) の村落がウィセシ (Wisesi)・グループと呼ばれている。これらのグループの名称から明らかなように、Schieffelinらが著書で使用している「Kaluli」という集団名は、「Kaluli」語を話す集団中の1グループの名称である。一方、行政において使用されている Orogo という名称も、同じく1グループの名称である。本研究では、対象を明確にしておく必要性から、「Kaluli」語を話すこれら4グループ全てを表す言葉として便宜上「カルリ」の名称を使用することにする。⁽⁵⁾

このように集団の名称に統一性がないのは、行政とアカデミズムの不整合もさることながら、人々が、同じ言語を使用しているという一応の集団帰属意識を持っているものの、我々の感覚で言う部族 (Tribe) のような固定的な集団を概念として持っていないことによることが大きい。社会構造については、後で詳しく述べるが、大まかに見て、彼らは、父系出自を基にした縦の人間関係よりも、兄弟姉妹関係を基にした横の人間関係を、社会構築の「規範」としており、固定的な集団帰属意識は、例えば日本に比べれば希薄なのである。

西欧世界との接触がなかった過去はもちろん、現在でも、この地域において貨幣経済に包含されるような産業は存在しない。彼らが消費するものは、ほとんどが彼ら自身で生産したものであり、また消費する以上のものを生産してはいない。もちろん彼らも他の地域から完全に孤立した「自給自足」を行っていたわけではなく、昔から、食塩、交換財となる貝殻などの交易は盛んであった。それでもこれらの交易は、時にはトラブルから戦争に発展することがあっても、彼らの伝統的な社

会のシステムを変容させるものではなかったし、何よりも「近代化」をもたらすものではなかった。

しかし自らの地域に産業を持たないカルリやその周辺の集団にも、貨幣経済は確実に浸透している。行政の介入やキリスト教の布教も、その浸透に一定の影響があったと考えられるが、最も大きな影響を与えたのは、1980年代に始まった、西部州における商業的木材伐採と、Lake Kutubu 周辺における石油採掘である。カルリの人々は、その両者ともに、出稼ぎ労働者として利用されることによって、現金収入を得、労働者キャンプで消費生活を学んだ。西部州における商業的木材伐採は、マレーシア企業が、主に日本向けの合板材を生産するために、ボサビ山の南斜面から Wowoi 川までの広域を、西部州の行政の協力を得て開発したものである。特に木材伐採の出稼ぎは、現在でも、カルリの多くの若者が従事しており、一つの村落から常に4,5人が、半年程度の労働に出かけている。

⑤……………カルリの社会と日常

カルリの社会は父系制の社会であり、土地所有及び成員権は、男性の系譜によって正当性が語られる。また結婚は、交差イトコとすることが推奨され、平行イトコとの結婚は禁忌である。婚姻は、夫方居住であるが、女性は夫方の集団の成員権は持たず、生涯、父親の集団に帰属しているものと考えられている。ただしこのような「構造」に対して、女性自身あるいは彼女を取り巻く人々がどのような実践感覚を持っているかは、調査の項で後述するように、多様性が見られる。

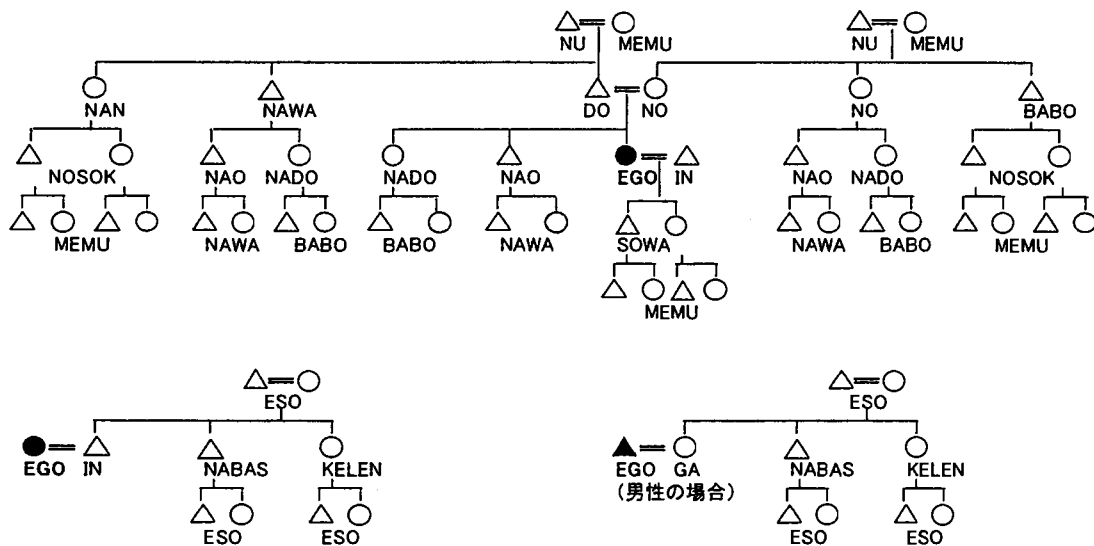


図4 親族名称

彼らの社会における、一般的な親族名称は、図4に示した通りである。本研究では「女兒死亡」に焦点を当てているために、この図ではEgoを女性にしているが、妻に対する名称が、ガ (Ga) であること以外は、男性においても名称は同じである。ただ女性は、出生リネージ内あるいは外部の人物と会話をする際には、このような親族名称を使用するのに対して、婚入りネージ内の人物と

会話をする際には、夫あるいは自分の子供から見た場合の名称を使用するのが普通である。もちろん男性においてもそのような傾向があるが、婚姻が夫方居住であるために、やはり女性の場合に顕著である。

クラン、リネージのような、アカデミックに定義付けられた構造も確認することはできるが、むしろ集団の実践的な構成原理となっているのは、ロングハウス共同体 (Longhouse community) である。このロングハウス共同体は、60人から70人が居住できるロングハウスに共住している人々によって構成される共同体であり、ドミナントな一つのリネージを中心として、婚姻によって血縁関係にある2から3のリネージが集合して構成されている。この共同体は、強固なコーポレートソサエティとは言えず、父系的構成原理はあるものの、母系血縁者が含まれていたり、あるいは任意の構成員と単なる友情で結ばれた人物が居住していたりすることもある。土地所有の権利自体は、父系リネージが保持しているものの、生業活動で使用する土地は、このロングハウス共同体の成員の合意によって管理されている。

ただし現在は、このようなロングハウス共同体が、数個集められて「村落」が構成されている。例えば、主な滞在地としたシバラマは、現在、3つのロングハウス共同体、7つの「リネージ」の集合によって構成されている。その集合は、1970年代に巡察官によって、半強制的に始められた。巡察官が、カルリのセンサスを取り、行政的管理を容易にするため、彼らに一ヶ所に定住し、村落を建築することを要請したのである。現在、彼らが、「村落」にどの程度の帰属意識を持っているかは、状況によって異なると考えられるが、少なくとも「村落」が形成される際には、それ以前から地理的に近隣であり、また婚姻により血縁関係も密であったロングハウス共同体同士が集合した。その結果、結婚や紛争などの社会的活動あるいは生業活動においてはロングハウス共同体に、宗教活動あるいは選挙などの政治活動においては「村落」に、帰属意識を持って行動していると考えられる。

婚姻においては、姉妹交換 (Sister Exchange) が推奨される。ある男性が、ある女性と結婚する際、女性の側の、図4中のナオ (Nao) は、男性のナド (Nado) を要求することが当然の権利とされ、またそのような交換を前提に結婚の交渉が行なわれるのである。この姉妹交換で結ばれた2組の夫婦は、出作り小屋あるいは村落内の核家族世帯の家に共住するなど、しばしば行動を共にし、資源を共有しあう。またこの2組を含む「リネージ」同士も強い紐帯で結ばれる。この2組の夫婦の結びつきが強いということは、その子供に当たるある人物から見てノソク (Nosok) に当たる異性は、その人物と兄弟姉妹のように共住して育つにも関わらず、交差イトコであるために結婚が可能であり、実際にしばしばこの組み合わせの結婚が行なわれる。

婚姻に際して婿側から嫁側に対して、婚資が支払われる。その際、姉妹交換を行なうのとは行なわないのでは、婚資に大きな差が生じる。伝統的にはフ (Fu) と呼ばれる真珠貝の貝殻、ガバ (Gaba) と呼ばれる子安貝の貝殻を束ねた首飾り、及びガサビス (Gasabis) と呼ばれるイヌの歯を束ねた首飾りが、交換財として支払われていた。⁽⁶⁾

彼らの生業の根幹をなすのは、バナナを中心とする果樹栽培、サゴデンプン精製、サツマイモ栽培、ブタ飼育及び採集狩猟である。カルリの食生活において、どのような生産物が、彼らの栄養素摂取に寄与しているのかを、表2に示した。この食物摂取量に関する調査と分析の詳細な方法論は

註に示す通りである。⁽⁷⁾

表から、消費されている生産物は、ほぼ上記の生業活動から生産されていると判断される。購入食品は、インスタントラーメンのみであり、その消費量も微小である。このことから彼らの社会に、貨幣経済が浸透しつつあるとはいっても、生業生態にその影響が及んではおらず、むしろ婚資の支払い等の社会生活における他の面で現金が活用されているのだと考えられる。またバナナの消費量

表 2 生産物の栄養素摂取に対する寄与

エネルギー (2437 kcal) *

順 序	食 品 名	学 名	摂取量(kcal)	%
1	BANANA	Musa cultivar	779.8	32.0
2	SAGO	Metroxylon spp.	647.0	26.5
3	PANDANUS	Pandanus spp.	352.4	14.5
4	SWEET POTATO	Ipomoea batatas	199.4	8.2
5	SUGAR CANE	Saccharum spp.	85.2	3.5
6	PIG	Sus scrofa	66.7	2.7
7	YAM	Dioscorea spp.	50.0	2.1
8	TARO	Colocasia esculenta	49.5	2.0
9	BANDICOOT	Echumipera spp.	38.0	1.6
10	BREADFRUIT	Artocarpus altilis	25.5	1.0

タンパク質 (50.2 g)

順 序	種 名	学 名	摂取量(kcal)	%
1	BANANA	Musa cultivar	10.20	20.3
2	BANDICOOT	Echumipera spp.	5.55	11.0
3	PANDANUS	Pandanus spp.	5.53	11.0
4	CRAYFISH	Cherax spp.	4.68	9.3
5	PIG	Sus scrofa	3.70	7.4
6	SWEET POTATO	Ipomoea batatas	3.14	6.2
7	CHOKO LEAF	Sechium edule	3.10	6.2
8	SNAKE**		3.01	6.0
9	FISH**		1.98	3.9
10	YAM	Dioscorea spp.	1.26	2.5

脂肪 (23.1 g)

順 序	種 名	学 名	摂取量(kcal)	%
1	PANDANUS	Pandanus spp.	10.10	43.8
2	PIG	Sus scrofa	5.04	21.9
3	BANDICOOT	Echumipera spp.	1.76	7.6
4	GRUB	Cerambycidae family	1.08	4.7
5	BANANA	Musa cultivar	1.01	4.4
6	FISH**		0.53	2.3
7	SWEET POTATO	Ipomoea batatas	0.47	2.1
8	SNAKE**		0.35	1.5
9	BIRD**		0.30	1.3
10	SUGAR CANE	Saccharum spp.	0.26	1.1

* 括弧内の数値は、順序外の食品も含めた総摂取量 (成人換算値)

** これらに分類される全ての種を合計したもの

と寄与の多さから、彼らの生業生態における果樹栽培の占める位置は大きく、高地ではサツマイモ、低地ではサゴデンプンに生業生態を依存しているパプアニューギニアの中で、この地域の生業生態がかなり特異なものであると言える。同じく、動物性タンパク質の摂取において、ブクロネズミ (Bandicoot) やザリガニ (Cray Fish) が、ブタ (Pig) よりも多いことも、ブタ飼育に完全に依存している高地地域の社会と対照的である。

⑥……………人口構造及び性比の動向

では具体的にカルリにおける「女兒死亡」の動態を分析していきたい。まずカルリの人口構造がどのようになっているかを、カルリに対する全数調査のセンサスで明らかにする。センサスは、カルリの10の村落、1,912人を対象とした⁽⁸⁾。調査においては、シバラマ出身のアシスタントと、対象村落のローカルレベル議会議員などの協力を得て、できる限り村民一人一人に対して性別と年齢、及び出生地(帰属)を聞き取った。年齢に関しては、まずシバラマの住民に対して、彼らを年齢順に並べ、飛行場建設などのイベントと彼らの出生を比較することによって、詳細なデータを取り、他の村落民に対しては、彼らがシバラマの誰と同年齢であるかと聞き取ることによってデータを収集した。

センサスの結果を、性比の動向として図示したものが、図5である。図において、比較の対象として図1で算出したパプアニューギニアのデータを挙げた。図から明らかのように、30歳以下までの性比の推移は、パプアニューギニア全体とだいたい同じ傾向を示している。つまり出生から15歳までは、女兒が多く死亡していることにより性比が増加し、15歳から30歳にかけては逆に男性が多く死亡することにより、性比が減少するのである。

しかし詳細に見てみると、カルリの結果とパプアニューギニア全体のデータには、多少違いがある。大きな違いとしては、0歳から4歳までの年齢階梯における性比が、カルリで100に近いのに対して、パプアニューギニア全体では110を超えている。先行研究で挙げたChenらの報告によれば、バングラディッシュの集団においても出生直後においては、男児の方が死亡率の高いことを鑑みれば、筆者の収集したデータは、ほぼ妥当な値であると考えられる。一方、行政によって5年ごとに行なわれる国勢調査から算出されたパプアニューギニア全体のデータは、5年間のタイムラグの間に死亡した女兒が数えられていない可能性が高いために、このような極端な値を示しているのだと考えられる。なぜタイムラグの間に死亡した男児は数えられるのに、女兒は数えられないかの要因を考えた場合、そこにはやはり親にとって記憶から欠落し易いのは女兒であるというSon preferenceの影響が推定されるが、データの量から言えば推測の域を出ない。

次に、20歳以上40歳以下の90人(男性45人、女性45人)の男女を対象に、母親を同じくする兄弟姉妹の生存と死亡について聞き取り調査を行なった。これは1人の母親から何人の子供が生まれ、どの年齢階梯で死亡率がどの位であるかを割り出すためである。通常的人口学的方法では、この完結出生数は、直接母親に問うのであるが、カルリの場合、閉経まで生存している母親が少なく、十分な例数を集めることが困難であるために、兄弟姉妹に問うという間接的な方法をとった。調査は、人口構造を明らかにするためのセンサスと同じく、カルリの10の村落において実施した。

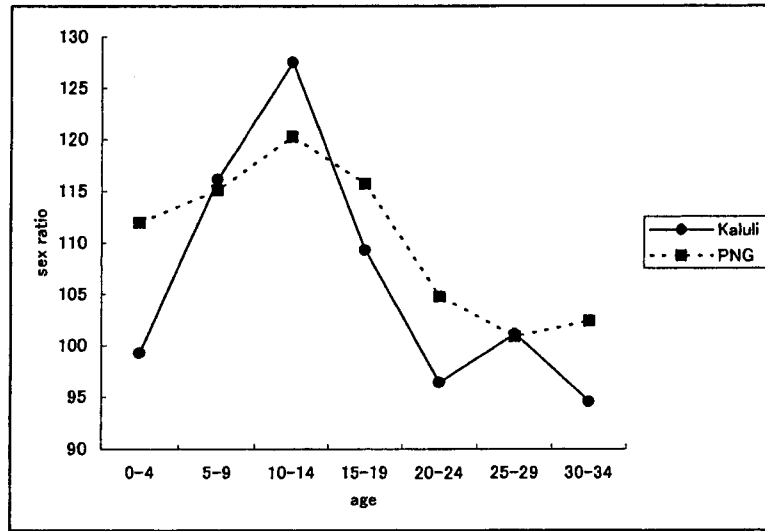


図5 Kaluli 及びパプアニューギニアにおける性比の年齢推移

ただし 20 歳以上 40 歳以下の全数ではなく、協力の得られた対象者で、母親が重複していない者を集計した。死亡年齢については、センサスと同様に、シバラマの誰と同じ位の年齢で死亡したかを聞き取った。分析においては、年齢層を、5 歳以下、5 歳以上 15 歳以下、及び 15 歳以上の 3 つのみにまとめた。聞き取りという調査方法から、生存している者でも 1～2 歳の誤差が予想され、まして死亡している者についてはより誤差が出るものと予想されるからである。

その結果の集計を、表 3 に示した。表を見てみると、5 歳以下の女兒、及び 15 歳以上の男性が、それぞれの異性よりも、明らかに多く死亡している。なお χ^2 検定の結果は危険度 1% 以下で、全ての年齢層において出生数と死亡数が男性と女性において独立ではなかった。つまり前記のような判定に加えて、5 歳以上 15 歳未満の年齢層では、男児の方が多く死亡しているという判定である。このことは人口構造の項で述べた、15 歳まで女兒が多く死んでいるという判断に矛盾している。

表 3 完結出生数及び死亡の動向

	男性	女性	合計
完結出生数			5,344
出生	259	222	481
生存	176	154	330
死亡	83	68	151
5 歳未満死亡数	37	44	81
5 歳未満死亡率	0.143	0.198	0.168
5 歳以上 15 歳未満死亡数	15	7	22
5 歳以上 15 歳未満死亡率	0.058	0.032	0.046
15 歳以上死亡数	31	17	48
15 歳以上死亡率	0.120	0.077	0.100

この結果のズレは、主に調査方法の違いによると考えられる。センサスの調査は、現在生存している対象者を直接数えたのに対して、この調査は、死亡した者を対象者に思い出してもらおうという間接的集計である。この方法では、行政が行なう調査と同じようなデータの漏れ、つまり出生及び死亡がより印象的でない方の性、この場合は対象者の姉妹に対する記憶が不鮮明になり、集計に表れてこない効果が避けられないと推定される。

表を詳しく見てみると、出生において、性比は 117 であり、100 あるいは 105 から大きくずれている。実際の性比は、直接に集計を行なったセンサスの方が明らかに信頼性は高いことから 100 前後と考えられるが、男性が全員集計されたのだと仮定すると、30 人前後の女性が集計に表れて来

なかったと推定される。現在生存している対象者のデータが欠損しているとは考えにくいので、その30人前後の女性は、いずれかの年齢層において死亡している可能性が高い。それにより、センサスから死亡率性差が比較的少ないと推定される、5歳以上15歳未満の年齢層で死亡率性差の逆転が起こったのだと考えられるのである。いずれにしても5歳未満の年齢層で、女兒が多く死亡していることには間違いがないと考えられる。

パプアニューギニア全土における統計調査の結果によれば、特殊合計出生率は、5.4であり、乳児死亡率は0.072である [Ministry of Health 1990]。これらの値と比較すると、本調査における完結出生数の値は、ほぼパプアニューギニア全土の値と同等である一方で、死亡率は高い。誤差を省みずに、本調査の乳児死亡率を算出すると、男児で0.081、女児で0.113、全体で0.096である。これは、センサスの項でも考察したように、カルリにおいては感染症や事故に対する有効な治療が提供されていないことによると考えられる。

⑦……………性選好の傾向

これまでの調査によって、カルリにおける性比の偏りと「女児死亡」が確認された。では彼らにおける性選好の傾向はどうなっているのだろうか。それを明らかにするために87組、174人の夫婦を対象として、今後子供が生まれてくるなら、男児を何人望むか、及び女児を何人望むかについての聞き取り調査を行なった。またそれらの理由と、夫婦の既存の子供数及び性別も聞き取った。対象者は、死亡とその原因に関する調査と同じく、10の村落における、協力の得られた者である。分析は、夫と妻を別々に行ない、また夫婦の既存の男児及び女児数によって分類する。

表4 性選好の傾向

	夫			妻	
	例数	希望男児数(人)	希望女児数(人)	希望男児数(人)	希望女児数(人)
合計	87	1.01	0	0.22	0.14
既存男児0人	23	1.78	0	0.57	0.17
既存男児1人	37	0.95	0	0.08	0.22
既存男児2人以上	27	0.52	0	0.11	0
既存女児0人	28	1.75	0	0.36	0.43
既存女児1人	32	0.84	0	0.09	0
既存女児2人以上	27	0.48	0	0.26	0

調査の結果を、表4に示した。夫婦共に男児を望む者が明らかに多かったが、その傾向は夫で特に強い。夫においては、女児を望む者は皆無であり、その傾向は、既存の子供の性別によらず一貫している、一方、妻においては、既存の子供に男児がいれば女児を、既存の子供に女児がいれば男児を望む傾向が見られる。また聞き取りの項目には加えなかったのだが、調査を進めていく上で、どちらでもよいという答えが妻において多く、男児及び女児を望む割合の値を低くしていた。

妻において、性選好の傾向はそれほど顕著でないように感じられるが、前述のWFSにおいて使

われていた指標 (Index of Son preference : 次の子供に、男児を望む母親の数を、女児を望む母親の数で割った値) を算出してみると、1.58 である。この値は中程度の男児選好を示す値であり、決して低いものではない。夫の男児選好の傾向も加味すれば、やはりカリの親、あるいは社会全体は、男児選好の傾向を持っているのだと判断される。

夫が男児を望む理由では、「男児が増えれば家 (ロングハウス) も強くなる」、「男児が増えれば、自分を助けてくれる者が多くなる」、「女児は他の家に行ってしまう」など、父系制という構造と、夫方居住という実践を反映したものが大半を占めていた。妻が男児を望む理由でも、大体同じような答えが返ってきた。一方、妻が女児を望む理由では、「もう男児はいらない」、「私の労働を助ける子供が欲しい」など、より個人の状況を反映した理由がほとんどであった。

また女児には婚資という見返りがある故に女児を望むという答えが、調査前には予想されていたが、そのような理由付けは皆無であり、その訳は「婚資は広く分配されるものであり、親が子供を育てる苦勞に比べればその見返りはないに等しい」というものであった。どちらでもよいという答えに対する理由は、「子供の性別は操作できない」というものも多かったが、特に妻においては、「もう子供はいらない」という答えが大半を占めていた。この事実は、伝統社会においては多産が望まれるという、人口学あるいは民族誌の見解よりも、途上国の女性は多産を強いられているというフェミニズムの見解を支持するものである。「もう子供はいらない」理由も、「出産は痛い」、「労働が増える」等、身体に根ざしたものであり、カリの女性は必ずしも多産を望まないという傾向が、フェミニズムやバースコントロールの思想の影響とは関係なく、以前から存在していたことを示唆する。

⑧……………世帯内食物分配

次に「女児死亡」の要因を明らかにするために、ディファレンシャル・フィーディングが行なわれているか否かについて、食物摂取量調査を行なった。この調査は、シパラマ在住の男児 6 名、女

表 5 男児及び女児における栄養素摂取量

		エネルギー所要量 (kcal)		摂取量			
		年齢*	体重(kg)**	エネルギー (kcal)	タンパク質(g)	脂肪(g)	
男児	A	1	8	978.2	1,071.8	18.99	18.94
	B	4	17	1,560.6	1,584.8	29.43	21.61
	C	4	15	1,448.4	1,628.6	32.19	17.30
	D	4	15	1,448.4	1,392.8	28.81	18.97
	E	5	18	1,616.7	1,438.7	32.58	17.76
	F	13	37	1,953.8	2,108.9	59.83	21.37
女児	G	1	10	1,076.1	925.9	18.06	11.84
	H	1	9	1,014.4	310.2***	6.43	2.89
	I	3	14	1,327.4	1,142.7	18.36	19.11
	J	5	18	1,539.5	1,495.4	25.74	15.06
	K	5	18	1,539.5	1,296.7	23.04	9.58
	L	12	30	1,681.3	2,126.0	37.46	18.10

*年齢は、それぞれの対象者に対して調査を開始した時点のもの

**体重も、それぞれの対象者に対して調査を開始した時点のもの

***女児Hの摂取量の少なさは感染症によるものと推定される

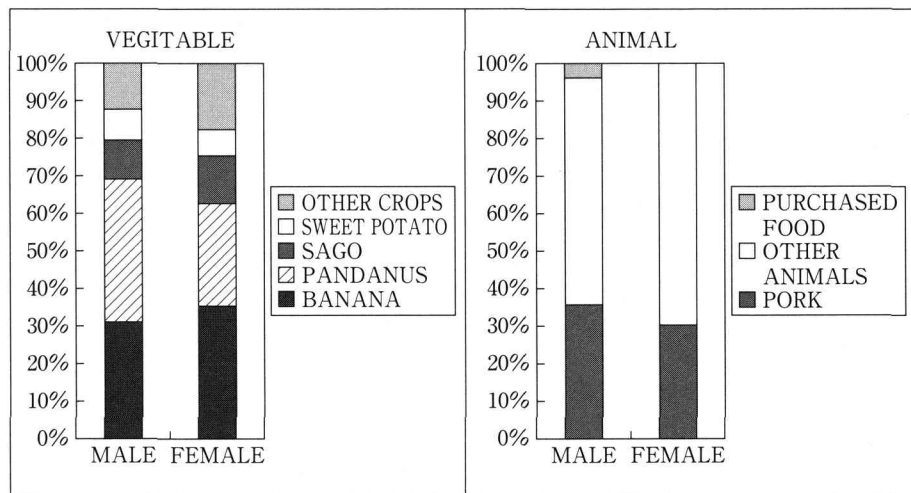


図6 男児及び女児の食物カテゴリー別エネルギー摂取量

児6名（内、8名は2名ずつに同一核家族、4名はそれぞれ別の核家族）を対象にして実施した。期間及び方法は、註(7)に示した通りである。

調査の結果を、表5に示した。対象者の中で、AとEは弟と兄、BとJは弟と姉、CとHは兄と妹、GとKは妹と姉という関係である。またDは乳飲み子を弟に持つ兄、Iは乳飲み子を弟に持つ姉である。またFは、弟を2人持ち、Lは兄と弟を持つ。

男児においては、エネルギー所要量に摂取量が達していないのは、DとEのみであるが、女児においては、L以外全員所要量に達していない。エネルギー所要量は、主に先進国のデータを元に算出されるものであり、また各対象者の活動レベルが明らかではないので、それに達しないからといって必ずしも彼/彼女らが栄養失調であることを示すわけではない。しかし一種の指標として男児と女児を比較して考えた場合、やはり女児は男児よりも摂取量が少ないと判断される。また同じ年代同士の男女を比較した場合、タンパク質及び脂肪についても、男児よりも女児の方において摂取量が少ない。ただしこの調査の分析に関しては、サンプル数が少ないために、統計学的分析は行なわなかった。

ではどのような食物の分配が、男女の差を生じせしめているのであろうか。植物性及び動物性の食物を、表2において多く消費されている食物を中心にカテゴリー分けし、男児と女児でそのエネルギー摂取量にどのような違いがあるかを表したのが、図6である。植物性食物では、男児はパンダナスとサツマイモからの摂取が多いのに対して、女児はバナナ及びその他の作物からの摂取が多

表6 血縁関係別の共食回数

関係	J(姉)+B(弟)	K(姉)+G(妹)	E(兄)+A(弟)	C(兄)+H(妹)
二人のみ	7	3	0	0
両親と	13	12	10	13
母親のみと	2	3	4	2
父親のみと	0	1	1	1
核家族外の人物と	1	1	3	2
兄弟姉妹別々	1	2	4	3
全食事回数	24	22	22	21

い。一方、動物性食物では、男児はブタからの摂取が多く、また購入食品からも僅かながら摂取しているのに対して、女児は他の動物からの摂取が多い。以上のような食物カテゴリー別摂取量の違いの中では、特に、パンダヌスからの摂取量の違いが脂肪の摂取量の違いに現れ、全体のエネルギー摂取量の違いに影響を与えていると考えられる。

ではこの食物摂取量の差異は何に起因するのか。それを明らかにするために表6に、上記の対象者を兄弟姉妹の関係で二人ずつ組み合わせ、その兄弟姉妹が誰と共に食事をしてきたか、あるいは二人のみで食事をしてきたかを回数で示した。その「食事」は、主食であるバナナ、サゴデンプン、サツマイモいずれかを摂取していた食事について計数した。

表から分かる通り、兄弟（E+A）及び兄妹（C+H）の組は、二人きりで食事を行なっていないのに対して、姉弟（J+B）及び姉妹（K+G）の組は二人きりで食事を行なっている。特に、姉弟（K+G）の組では、全食事数の三分の一近くを二人で食べている。これらの状況は、定量的には表せないが観察によれば、ただ二人で共食をしていたのではなく、姉の立場にある者が、弟及び妹に対して世話をしていたという状況であった。もちろんJやKは、まだ幼く、自分で食材を用意していたわけではなく、家の中にあつた食物、あるいは親が用意していった食物を調理して食べていた。それでもJやKは、まず弟あるいは妹の食事を調理し食べさせた後に、自分が残りを摂取するという食事の様相であった。そこにおいて、JやKが弟あるいは妹により多く分配しているのかは定量できなかったが、弟や妹に満足するまで食べさせる一方で、自分の分は不足してしまう状況は推定できる。

一方、兄弟（E+A）及び兄妹（C+H）の組は、しばしば核家族以外の人物と食事をし、二人が別々に食事を取ることも多いことが読み取れる。この核家族以外の人物とは、観察によれば、ほとんどの場合、平行イトコであるナドである。図4に示したように、彼らの社会ではいわゆる姉妹と平行イトコの女性の間と呼称の差異はなく、実践においても姉妹と平行イトコの女性は全く同じ存在である。表中の組み合わせの男児は、核家族内に姉妹がいないことから、しばしば両親と行動を別にし、その平行イトコと食事をとり、あるいは日中を共に過ごしていた。

⑨……………アデ関係

以上のような食物摂取量の差異を導くと考えられる兄弟姉妹関係は、カルリの社会において物語によって表象される規範によって構築されている。小川でザリガニ採集を行っていた時に、姉がザリガニの採れない弟に自分の採集したものを分配しなかったために、弟が鳥に変身してしまう（死んでしまうことの象徴）という悲劇的な物語を、カルリのほぼ全員が共有している〔フェルド1988〕。この物語で象徴的に語られているのが、アデ関係という規範である。アデ関係とは、男児が年長のナド（前述の通り平行イトコも含む）をアデと呼び、そのナドも男児をアデと呼ぶ、「姉弟関係」であり、アデである姉は、アデである弟を保育する義務がある。その義務は、アデ関係の内部においては、無償のものであり、姉から弟に何かを要求する権利はないのである。保育とは、具体的には、物語にも表れているような、食物の供給、あるいは調理、危険からの保護、遊び相手、叱責など、我々において母親が行なうと考えられることは、授乳以外全てである。

物語においては、姉が弟にザリガニをあげなかったために、弟が鳥になってしまうという不幸が起きてしまった。食物の分配を拒否されるという状況は、カルリにおける全ての先行研究が記述するように、彼らにとって最も不幸な状況の一つである。それに加えて、本来、必ず食物をもらえるべき、姉からもらえなかったという状況は、彼らにとって非常に「悲しい」印象を与え、それ故に物語が物語として成立しているのである。この物語を聞くことによって、姉である女兒、及び弟である男児は、「悲しさ」を共有し、またそれぞれのアデ関係における「役割」を改めて内面化するのである。

これら表の結果から明らかなように、アデ関係は表象として表れる規範としてだけではなく、彼らの日常においても、内面化された実践的な行為として表れている。姉の立場にある者は、年少の者、特にアデ関係にある弟に対して、食事などの日常的な活動において面倒を見ており、また親などの周囲の人物もそのことを当然のこととして、子供の世話あるいは統括を、姉の立場にある者に任せているのである。

ただし日常において、アデと呼ばれている姉が、完璧にその義務を果たしているとは限らず、個人個人で義務の達成度は異なる。非常な責任感を持って、過保護と思えるほどに弟の世話を焼く姉がいる一方で、親に対する依存心が強く弟の世話はおぼろげな姉もいる。ただしその違いを評価する周囲の目があり、責任感の強い姉は、「結婚相手として適している、やさしく働き者の『女性』」として語られ、一方、責任感のない姉は「結婚相手として適さない、甘えん坊で怠け者の『女性』」として語られる。

さて彼らの社会構造は、アデ関係の実践、あるいは姉妹交換の実践に見られるように、兄弟姉妹間の関係を軸にしている。Kellyは、同じ高地辺縁部のエトロクの社会において、姉妹交換によるロングハウス共同体内の「リネージ」間の紐帯を強調している [Kelly 1977]。彼はまた、ロングハウス共同体間においても、その系譜関係や同盟関係を、先祖を辿って得られるような親子関係ではなく、婚姻を辿って得られるような兄弟関係によって結んでいることを明らかにした。エトロクとカルリは、言語あるいは生業において差異があるものの、社会の構成自体にそれほど差はないと考えられ、彼の主張はカルリにも適用できると考えられる。

実際、共同体間の系譜を、兄弟姉妹の関係に求めることは、カルリにおいても事例を挙げられる。あるワスウェイの男性が、あるガンバロの青年について、「彼は私の兄弟なのに、何の援助もしてくれない」という不満を漏らしていた。ガンバロの青年は、高学歴を経て、近隣の石油開発に技術者として参加し、多額の収入を得ていたのである。ワスウェイの男性とガンバロの青年の間には、何の血縁関係もないが、それぞれの所属する共同体は、もう一つ別の共同体（ワナゲサの）から、一組の姉妹を、それぞれ姉妹交換によって受け取っており、その関係を称して、男性は「兄弟」と表現したのである。男性の言説は、個人のものであり、しかも系譜関係の共有に失敗している。それでも兄弟姉妹関係を軸とした共同体間の関係が、彼の中に内面化されており、それを基にして言説を展開していることは確かに認められる。

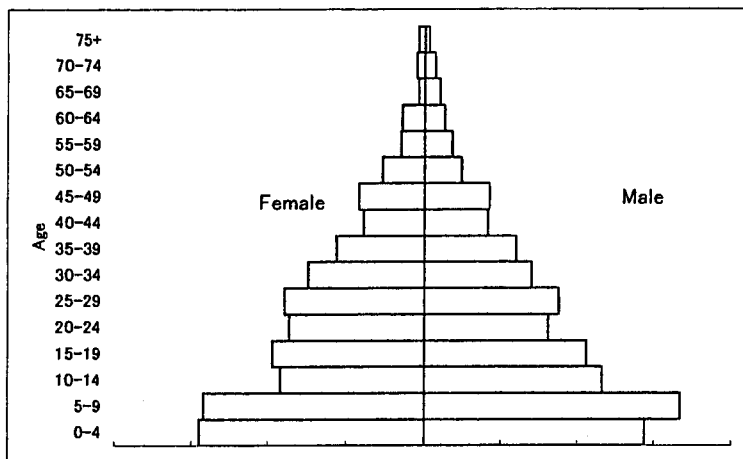


図7 カルリの人口ピラミッド

表7 20歳以下の男女における両親の生存死亡の状況

	男児	女児	合計
父親死亡	14	8	22
母親死亡	6	4	10
両親生存	3	3	6
小計	23	15	38
両親生存	16	17	33
合計	39	32	71

⑩……………アデ関係の背景

ではこのアデ関係をはじめとする、高地辺縁部の社会における兄弟姉妹関係の重要性は何に起因しているのであろうか。もちろんそこには社会構造の再生産に関わる複雑な過程が存在すると考えられるが、本研究において社会の再生産を扱うことは目的から逸脱してしまうことになるので、詳細は参考文献を参照されたい。しかしその再生産の背景になると考えられ、かつ容易に実証できる要因を一つここに挙げておきたい。それは彼らの社会において、親が早くに死亡しているという人口構造である。

図7に、センサスで求めた彼らの人口構造を人口ピラミッドとして表してみた。図の形を見ると、年少人口の多い、いわゆる「富士山型⁽⁹⁾」となっている。つまり若年齢層の人口に比較して、それ以上の年齢層の人口が少ない。これが「家族」に対して何を意味するかと言うと、子供が早くに親を失ってしまうということである。

その間の様相をより詳細に分析するために、シパラマの20歳以下の男女において、親が生存しているか死亡しているかという状況を表7に表してみた。これを見ると、彼らの半数以上がすでに父親、母親のどちらか、あるいは両親共失っている。このことから、親が死亡していることは、彼らの社会において常態の一つであると言える。

つまり彼らの社会において、全年齢階梯の死亡率が高い結果、核家族のみによって社会の再生産は不可能であり、核家族以外の社会の再生産単位が必要なのである。親子関係もちろん重要な社会的関係の一つには違いないが、それのみに基づいて「家族」を構築することはリスクが高い。兄弟姉妹関係を軸にしたロングハウスコミュニティは、核家族に代わる社会の再生産の単位であり、その中におけるアデ関係はロングハウスコミュニティを構築する根本的規範の一つとなっているのである。

そして「女兒死亡」は、その構造と関係性が、アデ(姉)、アデ(弟)、あるいはその周りの人々それぞれの主体において内面化されていることによって、アデ(姉)が自ら負担を増大させるが故

に発生すると考えられる。⁽¹⁰⁾ 本論文では女兒が死に至る個別の過程を描くことはできなかったが、食物摂取量が男児と女児で違う以上、栄養失調をはじめとする死亡及び疾病リスクを女児のほうが多く負っていることは間違いない。そのリスクを負うことは、親が「差別」することによって導かれているのではなく、「姉」「弟」という子供における特異なジェンダーを内面化した子供たち自身の自律的意思によって導かれているのである。

⑩……………ジェンダーと兄弟姉妹関係

本研究では、親が多く死亡しているという人口構造が、アテ関係をはじめとした兄弟姉妹を軸とする社会構造の背景となり、その結果女児の主体的な意思決定によって「女児死亡」が導かれるという事例を示した。男児選好に関する先行研究を顧みれば、15歳平均余命の短い集団において、性比の年齢推移に「女児死亡」が認められれば、そこに兄弟姉妹関係が介在している可能性のあることを、本研究の結果は示唆する。結果を安易に一般化するべきではないが、少なくとも親子関係のみに着目して「女児死亡」の問題を論じることは問題を見誤るであろうことは推論できる。

では聞き取り調査の結果において、先行研究と同じように男児選好の傾向が見られたのはどう解釈すべきだろうか。結果を注意深く見てみると、男児を強く望んでいるのは父親であり、母親は「どちらも欲しくない」という答えが大半であった。つまり父系制の構造の中で共同体を維持していくためには、常に男性が求められるのであり、父親は共同体の成員という立場から男児を欲していたのである。一方、母親は共同体内の日常に生きる個人という立場から、出産、育児の困難さのために、どちらも欲しくなかった、あるいは望んでも育児を補助してくれる女児の方を欲したのである。筆者という共同体外の人間が質問を行なった際、元来共同体の成員である父親は共同体を代表する立場をとる傾向があり、父系制夫方居住という構造の中で、元来共同体の成員に含まれない母親は個人の立場に立つであろうことは、結果が出た現在そう考察することが可能であるが、調査時点では考慮に入れていなかった。今後の調査において再考すべき点である。また同じようなバイアスを先行研究も考慮に入れていない可能性は高く、男児選好に対する人口学的研究は、ジェンダーの多様性に対する視点を取り入れながら、さらに再考していく必要があると考えられる。

さて本研究の事例で明らかになったように、「近代家族」における人間関係を多様な社会形態に一般化して当てはめることは不可能である。特に、夫婦関係におけるジェンダーを追求していくにも関わらず、家族内の子供に対してジェンダーを考慮せずに、親子関係のみから子供を議論する傾向は、依然多くの集団において死亡率が高いままである以上、研究においても、様々な実践においても不適切であることは言うまでもない。例えば、そのような子供のジェンダーを考慮せずに、学校を建設してから、女児が登校してこないことを「女性差別」として憂うことは、当該集団に対する理解が浅過ぎると言わざるを得ない。

そこで様々な社会における兄弟姉妹関係は、子供のジェンダーを分析していくのに最も重要な要素の一つとして再考されるべきである。何度も述べてきているように、「近代社会」以外では50歳程度まで生きられる人間に限られている以上、核家族にせよ拡大家族にせよ、その再生産の担い手は親だけではなく子供たち自身であるはずだからである。日本においても、カルリをはじめとした

他のほとんどの社会においても、「兄弟」「姉妹」のように子供をジェンダーで区別し、それぞれに役割が与えられている兄弟姉妹関係は、その子供たち自身の社会的立場の最も基本的なものであるはずだからである。

本研究では事例として、「女兒死亡」に対する人口学的研究の西欧中心主義的傾向を批判し、「女兒死亡」における兄弟姉妹関係の関与を描いてきたが、このようにして分析していくことのできる子供に関わる問題はまだまだ多く存在するに違いない。「近代家族」の枠組みを強制的に当てはめられて、現在まで等閑視されてきた問題を、アリアスに代表される社会史の立場からだけではなく、人類学、民俗学、歴史学等の分野は今一度、見直していくべきである。

註

(1)——15歳以上の年齢階梯においては、性比の値が減少している。つまり男性の死亡が顕著であることが示唆される。この男性の死亡も、問題とされるべき現象であるが、本研究では、研究の規模を制限する必要性から、対象を「女兒死亡」の問題に絞った。

(2)——このような性選好を問う項目を、人口統計資料を収集する際にアンケートに含めることは、主に人口増加率を推定するために理想子供数を知る必要があったことから、1970年代から1980年代にかけて各国で行われるようになり、日本でも人口動態調査において1982年から行われている。この理想子供数を知るというテーマは、それまでの人口学において唯一のパラダイムであった人口転換の古典的理論に替わるような、新しいパラダイムとして1970年代に提言された、ミクロ経済学的モデル [Creland and Wilson 1987] の中心的な議論である、「Value of Children」の文脈において現れてきた。

(3)——南アジアにおける研究に刺激を受け、性選好と死亡率性差の関連を追究していく同様の研究が、一人っ子政策下の中国 [Ren 1995]、あるいは他の発展途上国でも行われ始めている [ex. Campbell and Campbell 1997, Obermeyer and Cardenas 1997, Lee 1995]。例えば、Renは、中国の人口統計資料を基に、多変量解析の分析方法を使用しながら、山西、遼寧、広東の3省で、低年齢層の死亡率性差が存在すること、それには地域差、年代差が存在すること、及び出生順序（第何子であるか）と親の教育水準が関係していることを明らかにした。つまり出生順序の関係性によって、長男が最も優遇され、末の娘が最も差別されていることから、男児選好と「女兒死亡」の関係を間接的に示しているのである。しかし南アジアのデータに比べて、他の地域における研究に使用されるデータは限られたものであり、それ故、決定的な証拠を明示するような研究はできない状

態である。

(4)——大バプア平原の諸集団については、E. Schieffelin [Schieffelin 1976]、B. Schiffelin [Schieffelin 1990]、Feld [フェルド 1988]、Kelly [Kelly 1977]、Ernst [Ernst 1984] らによって、西欧との接触直後から、多くの民族誌が記されて来ている。この内、E. Schieffelin、B. Schiffelin、Feldの3人は、カルリを主要な対象としており、E. Schieffelinは儀礼について、B. Schiffelinは言語について、Feldは歌について民族誌を完成している。彼らの、「女兒死亡」の問題に関連する議論は、調査の結果と関連付けながら詳しく述べるが、彼らは、いずれもボナ (Bona) と呼ばれる村落を調査地としており、ボナは、筆者が主な滞在地としていたシバラマよりも約200m標高が高く、方言、慣習なども幾分異なる。彼らと筆者の、収集した情報の相違は、調査を行なった年代の相違に加えて、調査地の相違にも由来するものと考えられる。

(5)——カルリが、西欧の側の記録に現れるのは、1950年代である。カルリの共同体名が初めて登場するのは、Lake Kutubuの巡察拠点に所属するC. Terrellによって行われた1952年の巡察官の報告においてである [National Archives of Papua New Guinea 1953]。その後、1966年までLake Kutubuの巡察拠点がこの地域を管轄し、地図作成及びセンサスなどを行っていた。1966年からは、北方の高地にあるKomoに巡察拠点が建設され、それ以後、Komoがこの地域を管轄するようになった。

1975年のバプアニューギニア独立後は、南部高地州のKomoの行政支局が、この地域を管轄し、独立と同時に設立されたローカルレベルの議会もKomoに置かれた。しかし1980年代に、このシステムは、再編され、カルリの村落の一つである、ムルマに行政支局が新設さ

れ、ローカルレベル議会もムルマに置かれるようになった。1984年には、ムルマにセスナ機発着場が完成し、同時に小学校も建設され、それ以後、ムルマは、この地域の社会的中心となっていく。

(6)——現在50歳台の男性が、20歳台に結婚した際には、姉妹交換をした場合の交換財は、平均して、フが5個、ガバが2個、ガサビスが1個であり、姉妹交換をしなかった場合には、フが10個、ガバが10個、ガサビスが4個であった。これらの交換財は、個人が所有しているものではなく、以前の婚姻で得たものを保管していたり、塩や樹脂などの取引によって他集団から得たり、あるいは他の共同体や集団から奪ったりしたものをロングハウス共同体が所有しているものであった(厳密な規範としては、その中のリネージ)。現在では、現金(キナ)、斧、ブッシュナイフ、及びブタが、婚資として支払われる。現在、姉妹交換をした場合の婚資は、平均して、現金が400キナ、斧が1振、ブッシュナイフが2振、ブタが2頭であり、姉妹交換をしなかった場合には、現金が1,300キナ、斧が5振、ブッシュナイフが4振、ブタが4頭である。

(7)——8世帯の35人を対象に、期間は1999年の8月から9月の2ヶ月間、1世帯ごとに1週間の調査を行った。彼らの年齢及び体重は、調査時が異なることから、それぞれの対象者に対して調査を開始した時点で計測し、それを用いた。調査では、1歳から対象者としたが、対象者は全て離乳済みであることを確認して調査に含めた。調査においては、彼らが調理する前の食物ごとの重量を直接に秤量し、その分配を確かめて各自の摂取量を得た。分析においては、まずエネルギー、タンパク質、脂肪の栄養素摂取量を、South Pacific Commission刊行の食物成分表[Dignan 1994]を用い、食物摂取量から算出した。またエネルギー摂取量を、対象の性別や年齢に影響を受けることなく比較するために、エネルギー所要量(Energy Requirement)を一人一人求めた。その際、FAO/WHO[FAO/WHO/UNU 1985]による性別、年齢、及び体重別のBMR(Basic Metabolic Rate)換算式を用い、BMRの値を、同じくFAO/WHOによる子供のエネルギー所要量の換算式に代入して求めた。

(8)——12あるカルリの村落の内、2つの村落(ワビミセン及びガンバロ)に関しては、村民の協力が得られなかったため、結果が得られなかった。調査期間は、筆者が、カルリの地に滞在していた1年間である。調査期間中に出生及び死亡した者は、調査で得られた人数から省いたので、結果としては、1998年11月時点の人口と言うことになる。聞き取りの際、バブアニューギニアの共通語であるビジン・イングリッシュが理解できる者に対しては、それを用いて聞き取りを行ない、理解できない者に対しては、アシスタント等の補助を得て、カルリ語及びビジン・イングリッシュを用いて聞き取りを行った。聞き取りに関しては、以下の調査においても、同様の方法を用いた。

(9)——「富士山型」の人口ピラミッドにおいては、0-4歳の年齢層が本来最も多いはずである。しかし図から、5-9歳の年齢層が最も多くなっている。これは、1997年にバブアニューギニア全土を襲った旱魃の影響であると考えられる。カルリにおいてもその影響は甚大であつたらしく、近隣の川が干上がってしまったという言説も聞き取れた。その結果、食料資源、特に水辺の資源であるサゴデンブンやザリガニなどの資源が枯渇し、栄養状態の悪化から、死亡率が上昇した、あるいは出生率が低下したのだと考えられる。それ故に、表4-1からも明らかなように、死亡率の最も高い0-4歳の年齢層が多く死亡し、また新たに生まれる子供も少なくなったため、この年齢層が少なくなったのであろう。ただし以上のことは、あくまで推測であり、定量的な調査は実施していない。

(10)——彼らの社会において、アデ関係は必ず成立することを考慮してもらいたい。日本等の社会の中では、「姉」が必ず「家族」内に存在している状況は考えられないが、平行イトコも「姉」範疇に入っているカルリの社会では、ほとんど全ての「家族」(ロングハウスコミュニティ)で「姉」が存在しているのである。またアデ関係の裏の面として、「妹」というジェンダーが彼らの社会において重要視されない結果、実践において「妹」の立場にある女兒の死亡あるいは疾病リスクが高くなっていることも推測できる。

参考文献

- アリエス, P. 1981 『子供の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』杉山光信, 杉山恵美子(訳) みすず書房 (Aries, P. L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Regime. Editions du Seuil 1960)

- 柏木恵子, 高橋恵子編 1995 『発達心理学とフェミニズム』 ミネルヴァ書房
- 児島恭子 1997 「養老五年籍の「姉」「妹」の意味——人名と親族名称の分析による母系実態の解明」『家・社会・女性 古代から中世へ』 前近代女性史研究会編 吉川弘文館
- 総務庁統計局 1998 『人口推計年報 平成9年10月1日現在推計人口』 総務庁統計局
- 総理府内閣総理大臣官房男女共同参画室編 1996 『北京からのメッセージ 第4回世界女性会議及び関連事業等報告書』 総理府
- スピヴァク, G.C. 1998 『サバルタンは語る事ができるか』 上村忠男訳 みすず書房 (Spivak, G.C. Can the subaltern speak? University of Illinois Press, 1988)
- 速水 融 1988 『江戸の農民生活史——宗門改帳にみる濃尾の一農村』 日本放送出版協会
- フェルド, スティーブン 1988 『鳥になった少年 カルリ社会における音・神話・象徴』 山口修, 山田陽一, 卜田隆嗣, 藤田隆則訳 平凡社 (Feld, S. Sound and sentiment: birds, weeping, poetics, and song in Kaluli expression. University of Pennsylvania Press, 1982).
- フックス, ベル 1997 『ブラック・フェミニストの主張——周辺から中心へ——』 清水久美訳 勁草書房 (Hooks, B. Feminist theory-from margin to center. South End Press 1984)
- Campbell, E.K. and P.G. Campbell 1997 Family size and sex preferences and eventual fertility in Botswana. *Journal of Biosocial Science*, 29 (2): 191-204.
- Chen, L.C., E. Huq and S. D'Souza 1981 Sex bias in the family allocation of food and health care in rural Bangladesh. *Population and Development Review*, 7: 55-70.
- Creland, J., J. Verrall and M. Vaessen 1983 Preferences for the sex of children and their influence on reproductive behavior. *World Fertility Survey Comparative Studies*, No. 27. International Statistical Institute, The Netherlands.
- Creland, J. and C. Wilson 1987 Demand theories of the fertility transition: an iconoclastic view. *Population Studies*, 41: 5-30.
- Curtin, L.B. 1982 Status of women: A comparative analysis of twenty developing countries. Reports on the World Fertility Survey, No.5. Population Reference Bureau, Washington D.C.
- Dignan, C. (ed) 1994 The Pacific Islands food composition Tables. South Pacific Commission.
- D'Souza, S. and L.C. Chen 1980 Sex differentials in mortality in rural Bangladesh. *Population and Development Review*, 6: 257-270.
- Ernst, T.M. 1984 Onabasulu local organization. Ph. D. diss. University of Michigan.
- Kelly, R. 1977 Etoro social structure: A study in structural contradiction. University of Michigan Press, Ann Arbor.
- Lee, S.Y. 1995 The effect of the value of children on sex preference: A comparative study of Korea and Jamaica. Doctorate thesis, University of Wisconsin-Madison.
- McDowell, N. 1988 Reproductive decision making and the value of children in rural Papua New Guinea. In: N. McDowell (eds), *Reproductive decision making and the value of children in rural Papua New Guinea*: 9-44. P.N.G. Institute of Applied Social and Economic Research.
- Mead, M. 1971 *Sex and temperament in three primitive societies*. Dell Laurel, New York.
- Meggitt, M.J. 1965 *The lineage system of the Mae Enga of New Guinea*. Oliver and Boyd, London.
- Ministry of Health 1990 *Handbook health statistics Papua New Guinea. Policy planning and evaluation*, Department of health, Ministry of health, Port Moresby.
- Miller, B.D. 1981 *The endangered sex: Neglect of female children in rural north India*. Ithaca, New York.
- National Archives of Papua New Guinea Patrol report (1934-1975). Territory of Papua New Guinea.
- National Statistical Office 1990 Report on the 1990 national population and housing census in Papua New Guinea. National Statistical Office, Port Moresby.
- Obermeyer, C.M. and R. Cardenas 1997 Son preference and differential treatment in Morocco and Tunisia. *Study of Family Plannings*, 28 (3): 235-44.
- Ren, X.S. 1996 Sex differences in infant and child mortality in three provinces in china. *Social Science and Medicine*, 40: 1259-1269.
- Schieffelin, B.B. 1990 *The give and take of everyday life*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Schieffelin, E.L. 1976 *The sorrow of the lonely and the burning the dancers*. St. Martins' Press, New York.
- Strathern, M. 1972 *Women inbetween: Female role in a male world*, Mount Hagen, New Guinea. Seminar Press,

-
- London.
- Townsend, P. K. 1971 New Guinea sago gatherers: a study of demography in relation to subsistence. *Ecology of Food and Nutrition*, 1: 19-24.
- Warren, M. A. 1985 *Gendercide: the implications of sex selection*. Rowman & Allanheld, New Jersey.
- Weiner, A. 1976 *Women of value, men of renown: New perspectives in Trobriand exchange*. University of Texas Press, Austin.
- FAO/WHO/UNU 1985 *Energy and Protein requirements*. WHO.
- Williamson, N. E. 1976 *Sons or daughters: A cross-cultural survey of parental preferences*. Sage Publications, Beverly Hills.
- 1978 *Parents' preference and sex control*. *Population Bulletin*, 33: 3-35.
- Wurm, S. A. 1982 *Papuan languages of Oceania*. Gunter Narr Verlag, Tübingen.

(国立歴史民俗博物館考古研究部非常勤研究員)

(2003年3月28日受理, 2003年7月18日審査終了)

Gender and Sibling Relationship: From the Empirical Study in Papua New Guinea

ODANI Shingo

In this paper, I investigate the dynamics of the gender of children within the family, focusing on sibling relationship by analysis of the high mortality rate of female children in Papua New Guinea. Presently, while awareness of the constructiveness of the modern family has been shared among social sciences, the gender of children within the family construction in diverse social condition is seldom studied, in spite of a lot of relative problems. High mortality rate of female children is one of the relative problems. While this problem has been analyzed in biomedical paradigm focusing on parents "son preference", such focus overlooks the constructiveness of family or gender. I undertook various kinds of surveys in Kaluli, one of the language groups living in Highlands Fringe of Papua New Guinea, from November 1998 to November 1999. At first, by analysis of the dynamics of demographic feature, I found the high mortality rate of female children. Secondly, by participant observation, mechanism of the high mortality is revealed, in which a unique sibling relationship in this population, that "elder sister" must take care of "younger brother", will cause death of the "sister". Thirdly, I clarify the dynamics of the constructiveness, in which the social construction based on the sibling relationship constructed by the demographic condition that lacks of "parents" generation leads the autonomous decision making of the "sister". The results of this study object former studies, that discuss high mortality of female children or gender relationship within family focusing merely on the relationship between parents and children. Such studies are not able to understand the problems and obstruct the resolution of problems.